

はじめ プロジェクト“一”のはじまり

このプロジェクトのいきさつからお話しします。

わたしには一人の親友がいました。その若山一（はじめ）君は先ごろの東日本大震災で津波の被害に遭い、帰らぬ人となりました。宮古市でいくつかの事業をおこし、自治活動やボランティアを通じて宮古の人びとに慕われていた若山君は、ラグビー仲間として大学時代をともに過ごした友でした。互いに企業をあずかり、それなりに悩みもあった私たちですが、会えば仕事の話は一切せずラグビー部時代に想いをはせ、楽しさに満ちた日々なことばかり語り合ったものでした。あの日、若山君は自分の会社の人たちを避難させてから、消防団の集合場所に向かったそうです。そして今もなお行方が知れないそうです。「本当に宮古を大切に大事にしてきたあの男が…」、宮古の仲間たちは口をつぐみます。わたしにも無念の思いがこみ上げてくるのです。

彼から三十数年にわたり送られてきた海の幸、それも手作りのタラコや昆布など季節を感じさせる品々は、故郷を愛し誇りとしてきた彼の気持ちが込められた贈り物でした。そんな彼の故郷に対する思いを伝え続けるために私に何かお手伝いできないだろうか、そう考え、プロジェクト“一”をはじめることになりました。

彼から送られてきた海の幸を扱う宮古のお店、私と若山君をつないでくれたお店を通じ、宮古の皆さんを応援することで、宮古が元気になればいい。そのために、お店の品々を値札の二割増しで買わせてもらおう。そうすればはたらく人びとの手取りが三倍になるじゃないか！はたらく人が元気になり、やる気になればお店も周りの人びともともに元気になる。二割増しが三倍に、三倍が十倍の元気を生み出すかも知れない、そう考えました。

平成二十四年の春からはじめたプロジェクト“一”で、宮古と高知を結ぶ絆が一つの形になりました。そしてその絆を今後もより強く深いものに育てて参りたいと考えています。被災地と応援者達をつなぐプロジェクト“一”、心温かい方々に応援していただければ幸いです。

平成三十一年三月

二神 昌彦 記